

たとえ人に馬鹿にされても

弘前大学教育学部附属中学校

長谷川 統 也

対象作品／椎野直弥著『僕は上手にしゃべれない』ポプラ社

皆さんはこの本のタイトル、『僕は上手にしゃべれない』を見てどう思いましたか。自分は、上手に喋れないというのは、なぜ上手に喋れないのか、なにかの病気なのではと、本の題名を読んだだけでは疑問がたぐさんあり、よくわかりませんでした。この本は家の本棚にありました。なんと色々な本を見ていると、一冊だけなんか題名が変わっているなという本を見つけました。気になったので手に取ってこの本を読むことにしました。

小学生の時から吃音という医学的には発達障害に当てはまる病に悩む主人公の柏崎悠太は、中学校でもみんなに馬鹿にされるのではと思います、中学校初日の自己紹介の時から仮病を使って教室から逃げ出してしまう。しかし、吃音をなんとしてでも直したいという思いから、「誰でも上手に声が出るようになります」という部活動誘いのチラシの言葉にひかれて放送部に入部します。クラスメイトで同じ放送部の古部

さんや、優しい放送部の立花先輩、姉、クラスの担任の椎名

先生などの多くの人に助けられながら、少しずつ変わっていく悠太の成長の物語です。

僕が、この作品を読んで一番はじめに思ったことは、悠太と僕は似ているということです。僕は吃音ではないけれど、自分の伝えたいことがなかなか伝えられないときや、話し始めに「こここんにちは」みたいに、緊張するようになってしまふときがあります。僕は気づいた頃から滑舌が悪く、小さい頃色々な人にかかわられて、「何言ってるのか全然わからない」と言われたことがあります。その時の気持ちや悠太の苦しみと似ていて、「なんでうまく喋れないんだ。」という悲しみと、「どうして馬鹿にするんだよ。」という怒りがありました。こういう経験があったため、悠太の悩みや苦しみに深く共感しました。

この本で一番心に残った場面は、弁論大会で悠太が吃音について発表している場面です。最初は喋ることが嫌いで自己紹介の時から逃げ出していた悠太が、弁論大会で発表できる

くらいまで成長したというところに感動しました。くじけても何回でも立ち上がり、ふてくされるような変な方向に行っても戻ってくるのができたからこそ、悠太は成長できたのだと思います。悠太の発表が始まり、出だしの言葉が言えず会場がざわついた時、立花先輩とお姉ちゃんが静かにさせてくれたところも心に残りました。たとえその人にどんな事情があろうと、関わり方は全員と一緒という、当たり前だけになかなかできないことができていたので、僕もこういう人になれたらいいなと思いました。最終的に、悠太は弁論大会でなんと賞にはいることができ、話すことが苦手な人でも、努力したらよい結果がまつているということに気づかされました。

この本で心に残った言葉は、立花先輩が言った「会話って自分の意思や考えを相手に伝えるためにするものだろう？」という言葉です。ちゃんと意思疎通ができる悠太との会話は、なんの問題もないから安心してと声をかけてあげたのはビックリしました。そして、この先輩は優しすぎると思いました。いくら優しい人とはいえ、遠慮して関わるのが普通だと思っ

ていたのですが、立花先輩は思っていることが伝わるだけでいいと、吃音に対してなんの差別の感情も持たなかったのが尊敬に値すると思いました。相手のことを考えずに自分の思ったことを率直に伝えつつ、遠慮もせずこのように相手が言われて安心することを言える人が、真の優しい人だということがわかりました。

この本を読んでわかったことは、努力と助け合いが大切だということ。悠太は吃音から目を離さず、ずっと嫌でも付き合ってきたという努力がありました。そして周りの人がそれをサポートし、その努力を無駄にせず最後まで付き合い、優しい助けを出すというこの二つが大切だということがわかりました。だから、これが自然にできるような人になりたいと思いました。

これから、苦しいことがあっても、どうしようもなくなくなってしまうときがあるかもしれません。それでも変わらず見守り支え続けてくれている家族や仲間がいるということを心にため、胸を張って堂々と自分の個性を出し切って生きていきたいです。